④ 小出の石地蔵さん

何時の頃に誰が祭ったものかは定かではないが、鬱蒼と茂る小出の杜の中を流れる清水川の畔に一体の石地蔵が立っていて、何時の頃からかその首は既に壊れ落ち、見るも哀れな姿を晒していたものと伝えられている。而も此の石地蔵は大方「子安地蔵」か「子育て地蔵」であったものらしく、赤児を抱いた姿をしていたものとされ、その霊験は頗る灼かで里の人達に深く信仰されていたものだった。

昔々の事、此の石地蔵に一人の若者某が村一番の力持ちになることを願って、夜毎夜毎の丑三ツ刻に懸命のお参りを続けたところ、丁度二十一日目の満願の夜のことだった。若者の首筋の辺りを生暖かい風がソーッと摩ったような気がして、ふと後を振り向くと、赤児を抱いた美しい一人の女が立っていて、「これこれ若者よ、力持ちになりたくば此の赤児を抱いて見給え」と言いながら、若者に赤児を手渡してスーッと闇の中へ消えてしまった。ところが不思議なことには若者の受け取った赤児は次第に重さを増し、どうしてもその重味に耐え切れなくなったので、遂に赤児を地面に置こうとしたところ、再び静かに現れた女はその赤児を若者から受け取り、スーッと何処へともなく姿を消してしまった。全身が綿のように疲れた若者は「不思議な事もあるものよ」と思いながら、家に帰って疲れを癒すのであるが、その疲れが癒える頃になると、やがて村一番の力持ちになり、その怪力を辺りに誇ることが出来たと云う……。

世にも不思議な地蔵菩薩の霊験物語である。